

第54号

発効日：平成22年9月16日
発行者：医学研究科広報委員会
印刷：やまと印刷株式会社

弘前大学大学院医学研究科・医学部医学科広報紙

医学部ウォーカー

- 1面：医学研究科長・医学部長寄稿
- 2面：新任教授紹介
- 3面：ハンガリー医科大生内科研修行われる
- 4面：二年次後期入学選抜終わる
- 5面：弘前医学会総会
- 6面：研究室紹介 脳神経病理学講座
- 7面：留学だより
- 8面：人事異動

題字 弘前大学長 遠藤正彦氏筆

医学研究科長 佐藤 敬

大学ランキング

医学研究科長・医学部長 佐藤 敬



「医学部ウォーカー」五十三号に続いて今回も再び触れますが、本年三月に公表された平成十九年度までの国立大学法人評価において、本学が最下位となったことは、私たちに与えた大きな衝撃でした。前回はこの問題を自らの問題として真摯に受け止める必要があることを述べました。しかし、一方で次のような考え方も重要です。

ほぼ同じ頃に公表された、Quacquarelli Symonds Limited によるアジアの大学ランキング(QS.com Asian University Rankings)ベスト200において、弘前大学は百七十一位でした。この事実は、教育学部の石川教授がネット上で確認し、学長に報告したとして地元の新聞でも紹介されましたので、多くの教職員が既知のこととは思いますが。私も改めてネット上で少し調べてみました。

このランキングは、研究論文の数(教員当たり)と質(被引用回数)、教育の質(教員当りの学生数)、卒業生の就職状況(アジア各国の雇用者による評価)、国際化(留学生数など)の諸点を点数化したもので、世界の大学ランキングにも用いられ、極めて妥当と評価される基準によっており、これらのランキング自体も定着しています。一位は香港大学、二位は香港科技大学、三位はシンガポール国立大学、四位は香港中文大学、五位は東京大学です。日本からは五位の東大をはじめ、国別では最多の五十七校が二百位以内にランクインし、本学は国内の国公私立大学中五十四位でした(我が国の大学数は

七百余)。残念ながら、本学は二〇〇九年のランキングでは百十八位でしたので、かなり順位を下げたことになりましたが、我が国の多くの大学、特に国立大学法人は二〇〇九年に比べて二〇一〇年の順位を下げています。このことも一つの事実として気にはなりません、ここでは本学の順位についての取り上げました。これで、溜飲が下がった、と言いたいわけではあ

りませんし、もちろん、満足すべき結果とも思いません。しかし、見方によっては、私たちの教育研究活動は「最下位」の評価を下されるようなものではないと言えます。とにかく、この事実から言えるのは、私たちは自信を失うことなく、今後も教育研究活動に邁進するとともに、従来通りのためめ改革に取り組んでいくべきであるということです。また、学生諸君にあっては、決して動揺することなく、引き続き勉学に励んで下さることを願うとともに、もし、この一文が受験生の皆さんの眼にとまることがあるとしたら、安心して弘前大学にチャレンジして下さいさるよう、訴えたいと思います。

弘前大学大学院医学研究科および保健学研究科では、北東北の三大学と共同して申請した、「北東北における総合的がん専門医療人養成プラン」が採択され、平成十九年度より五年間の予定で、がん診療に関わる専門医の養成に取り組んでいきます。本プログラムの最重要課題は、がん診療に関わ

る医療人の人材養成です。特に、がん死亡率が最も高いといわれている北東北のがん医療の改善や、医療過疎地域を多く抱える北東北地域において総合的がん専門医療人を養成することは大変重要な課題です。本プログラムの詳細についてはHPをご覧ください。(http://www.ganpro-kiatohokup.jp/)

松本文庫室オープン

附属図書館医学部分館分館長 蔵田 潔 (統合機能生理学講座 教授)

臨床研究棟改修に伴って、これまで附属図書館医学部分館で所蔵していた松本文庫として知られる多数の貴重資料を、臨床研究棟地下一階に設けた専用の部屋に移設し、展示と保管ができることになった。その新装「松本文庫室」開設記念イベントが六月二十九日に行われた。当日は松本文庫の寄贈者である松木明知名誉教授に遠路お越しいただき、午前十時から松本文庫室開設を祝してのティーブカットが松本文庫室前で行われた。室内閲覧に併せ、弘前大学出版会から復刻版として最近出版された松木

先生著になる「サー・ウィリアム・オスラー讃歌」および「現代西洋医学の系譜」の二冊が弘前大学出版会委員長の中根明夫教授から松木先生に贈呈された。

引き続き、医学部基礎講堂にて、薬科理事および大河原理事をはじめとする来賓と二年次医学部学生などの多数の出席

者の前で、松木先生による講演会が開催された。講演会は「クルムス、コッヘルそしてオスラー、松本文庫からメッセージを受け取ってほしい」と題するものであった。クルムスはドイツの医師、解剖学者であり一七二二年に「解剖図譜」を出版した。このオランダ語訳書「ターヘル・アナ

トミア」が江戸時代に日本に入り、これを杉田玄白らが翻訳したもののが「解体新書」として知られる日本初の解剖書である。杉田玄白とともに翻訳を行ったうち桐山正哲であった。松木先生は本学学生の頃から医学史に興味を持たれ、その中で桐山正哲の名を知り、彼の研究を行ってきた。松木先生が

医学部学生のとくに執筆した桐山正哲に関する論考が日本歴史学会編集のトップジャーナルである「日本歴史」に受理・掲載されていることは今日でも特筆されるべきことである。

桐山正哲は一八一五年(文化十二年)に亡くなっているが、その墓が弘前の禅林街の一角にある隣松寺内の墓地にある。現在無縁になつていてという桐山家代々の墓に松木先生は顕彰碑を建てられ、命日にあたる七月十日に除幕式が行わ

れた。同じく弘前藩医の洪江抽斎は森鴎外の史伝で有名であるが、この地に名を刻む桐山正哲もまた永く記憶されるべき名前である。まだご覧でない方は「松本文庫室」と桐山正哲顕彰碑を訪れ、医学の歴史と発展に思いを寄せることが、松木先生の思いに込められてい

るであろう。講演会を終えるに際し、松本文庫を含む松木先生の本学への多大な貢献に対し、弘前大学表彰が薬科理事から贈られた。

弘前大学では、がん治療認定医、腫瘍内科専門医、放射線腫瘍医、がん専門薬剤師、医学物理士、リハ緩和、と最も多くのコースを開設しています。平成二十年度七名、平成二十一年度十二名、平成二十二年度二十二名と徐々に入学者も増加しています。特に平成二十二年度には、全てのコースに大学院生が入学し、現在修学・臨床研修・研究に取り組んでいます。本プログラムは大学院のプログラムですので、従来の大学院教育システムに組み込む形で、教育が展開されています。例えば大学院講義の一部をがんプロセス用に変更して講義を行って

きましたし、平成二十三年度からは、三大学(秋田、弘前、岩手)で、臨床腫瘍学の共通大学院講義を開始することに決まりました。また、昨年・今年と他大学と共同で、がん治療認定医を増やす目的で勤務医向けに「がん治療認定医取得のためのセミナー」を開催したり、また「放射線腫瘍医を目指す学生・医師のセミナー」などを開催してきました。

本プランを通して他大学との連携が緊密になり、今後大学院教育の講義の共通化や単位互換の可能性もでてきました。本プランはあと二年で終了予定で、その後は未定です。しかし、本プラン実施期間内だけで専門医養成を行うことは不可能です。がん死亡が全国一位である青森県にとつては殊に、がん医療に関わる医療職の人材養成は今後とも大変重要な課題であり、医学部として今後も継続的に取り組むことが求められています。



松本文庫室で展示資料の解説をする松木明知名誉教授(左)。松木名誉教授から右に薬科理事、神田理事、花田病院長、廣田教授。

北東北がんプロフェッショナル養成プランについて

腫瘍内科学講座 教授 西 條 康 夫

弘前大学大学院医学研究科および保健学研究科では、北東北の三大学と共同して申請した、「北東北における総合的がん専門医療人養成プラン」が採択され、平成十九年度より五年間の予定で、がん診療に関わる専門医の養成に取り組んでいきます。本プログラムの最重要課題は、がん診療に関わ

る医療人の人材養成です。特に、がん死亡率が最も高いといわれている北東北のがん医療の改善や、医療過疎地域を多く抱える北東北地域において総合的がん専門医療人を養成することは大変重要な課題です。本プログラムの詳細についてはHPをご覧ください。(http://www.ganpro-kiatohokup.jp/)

弘前大学では、がん治療認定医、腫瘍内科専門医、放射線腫瘍医、がん専門薬剤師、医学物理士、リハ緩和、と最も多くのコースを開設しています。平成二十年度七名、平成二十一年度十二名、平成二十二年度二十二名と徐々に入学者も増加しています。特に平成二十二年度には、全てのコースに大学院生が入学し、現在修学・臨床研修・研究に取り組んでいます。本プログラムは大学院のプログラムですので、従来の大学院教育システムに組み込む形で、教育が展開されています。例えば大学院講義の一部をがんプロセス用に変更して講義を行って

きましたし、平成二十三年度からは、三大学(秋田、弘前、岩手)で、臨床腫瘍学の共通大学院講義を開始することに決まりました。また、昨年・今年と他大学と共同で、がん治療認定医を増やす目的で勤務医向けに「がん治療認定医取得のためのセミナー」を開催したり、また「放射線腫瘍医を目指す学生・医師のセミナー」などを開催してきました。

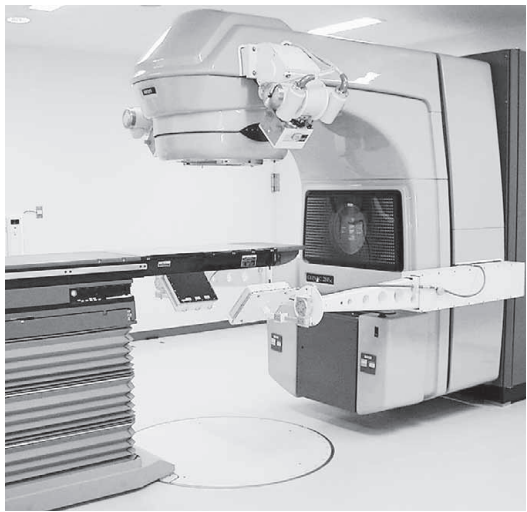
放射線科学講座教授に就任して

放射線科学講座 教授 高井良尋



この度、平成二十二年五月十六日付けで弘前大学医学研究科放射線科学講座を担当することになりました高井良尋と申します。

私は、山形県長井市という弘前と同様の雪国で生まれ、一九七六年に福島医科大学を卒業しました。卒業後、東京大学の放射線基礎医学教室に入り、大学院四年と助手三年の七年間、放射線生物学を学びました。その後、東北大学放射線科に入学し、臨床の放射線治療学、放射線腫瘍学のトレーニングを開始致しました。放射線科入局一年後より一年九ヶ月間秋田県



Varian 社と共同開発したイメージガイド放射線治療装置。これをベースに現在市販されている OBI (on-board-imager) が開発された。今年度、弘前大学に 2 台の OBI が導入される。

横手市の厚生連平鹿総合病院に放射線診断学も含めた放射線科医として勤務しました。東大時代と東北大学時代に二度、カナダ、バンクーバーのパイ中間子研究所に留学し、パイ中間子を用いた放射線治療の生物学的基礎と臨床研究を行っており、粒子線治療の経験をする事ができました。東北大学では Full time の放射線治療医としての診療と研究を行いながら、イメージガイド放射線治療装置のプロトタイプを開発したり(図)、放射線治療や化学療法に抵抗性の低酸素細胞を画像化するための PET 用薬剤 [¹⁸F]FETP-170 の開発などを手がけました。[¹⁸F]FETP-170 は現在東北大学で臨床応用を行っておりま

す。近年の放射線治療は、イメージガイド装置を用いたピンポイント放射線治療

おり、高齢化社会のがん治療の大きな柱になりつつあります。しかしながら、放射線治療を受けているがん患者は日本では二十五%弱に過ぎません(米国六十五%)。日本のがん患者は放射線治療の恩恵を十分に受けているとはいえない現状があり、各科の先生方にご協力をお願いしてこの状況を少しでも改善していきたいと思っております。また、放射線診断部門におきましては、MRI、CT の機器更新が行われ、よ

高度救命救急センター本格始動

高度救命救急センター長 浅利 靖
(救急・災害医学講座 教授)

平成二十二年七月一日、弘前大学医学部附属病院高度救命救急センターが開設しました。開設後、約一か月の間の高度救命救急センターの状況を少し紹介したいと思います。

救急車内で「高度救命救急センターの第一号の患者さんになりそうですね」と救急隊員とご本人が会話した直後、突然、けいれんとともに急変しました。すぐに救急車内で胸骨圧迫(心臓マッサージ)と人工呼吸が開始されました。救命セン



ターの正面で第一号の患者さん来院!と待っていたところ、救急車がスピードを上げて救命センターに飛び込んできました。救急隊員も張り切っているのかな?という気持ちで救急車のドアを開けたところ「心停止です」という救急隊員の叫び声が聞こえ事態は一変しました。幸いにもすぐに心拍が再開し、来院から十五分後には循環器内科専門医が心臓カテーテルによる専門

的治療を行いました。翌七月二日には暗門の滝で心停止となった患者さんが秋田県の防災ヘリ「なまはげ」により外来棟屋上のヘリポートに搬送されました。青森県のドクターヘリも八月初旬までの間に計四回飛来し、六月下旬から屋上へ



リポートには計八回、ヘリが飛来しています。開設後、一か月の間の救急外来の受診患者数は二百名で、このうち夜間・休日の各診療科の再来患者(掛かり付けの患者)が百八名、残りの九十二名が新患の救急患者でした。救命救急病棟への入院は四十六名、集中治療室への入院は七名、院内の各病棟への入院が三十三名、外来での死亡は六名でした。診療科毎の受入れ患者が多かったのは循環器内科が最多で四十六件、救急科が三十四件、脳神経外科が二十件、整形外科が十五件、心臓血管外科が十件でした。疾患内訳では、心筋梗塞などの重症急性冠症候群が十四例、重症心不全が五例、重症外傷が十例、病院外心臓停止が九例、重症脳血管障害が六例でした。

この一か月間で目立った事例をいくつかあげてみます。①七月は小児の重症外傷が目立ちました。約一か月間で七名の小児、多くが小学校の低学年の学童が車にはねられる外傷でした。②この夏は暑さで熱中症が多発しています。が、救命センターには三例、搬送されました。いずれも血液浄化療法などが必要とする重篤な熱中症で一名は残念ながら救命出来ませんでした。③不思議なこと患者さんの来院が重なります。ある土曜日は心筋梗塞の日でした。九時三十分、十一時、十二時、十三時、二十時と五例の心筋梗塞の患者が搬送され、



何人もの循環器内科医が呼び出されました。ある木曜日には、十三時十分に狭心症、その五分後の十三時十五分には脳ヘルニア状態の慢性硬膜下血腫が搬入されすぐに緊急手術となりました。十三時五十分にはドクターヘリで重症外傷が搬入され、十四時には心筋梗塞が搬入されました。そして、その一時間後には小児の脳挫傷(交通事故)が搬入され救命病棟で低体温療法が開始されました。④七月中旬には外傷性ショック、心タンポナーデの六十代男性が搬送され、ドレーナージだけでは改善せず、手術室まで行く余裕がなかったため心臓血管外科医が救急外来で緊急開胸止血術を行い救命しました。⑤マムシ咬傷で急性腎不全、DIC、呼吸不全となった七十代の男性。トリカブト中毒で心室細動が持続し経皮的な心肺補助装置



という人工心臓のような生命維持装置を使用し救命できた五十代女性など非常に稀な症例も経験しました。以上が本格稼働してから約一か月の状況です。重症傷病者が広域から搬送されている現状で、やりがいのある救急医療を実践しています。その反面、各診療科、手術室、集中治療室、放射線部、輸血センター、MEセンター、各病棟など院内の各部署は多忙になっています。嫌な顔一つせず全面的に協力してくれている関係者に心から感謝申し上げます。多忙ではありますが重症患者さんが集中する高度救命救急センターは、若手医師にとって修練の場として最適な環境であると思います。今後、さらに地域医療の充実と医師育成のために前進していきたいと思っています。

ハンガリー医科大学学生 内科研修が行われる

医学科学務委員 中 根 明 夫
(感染生体防御学講座 教授)

七月五日から四週間、ハンガリー・セメルweis 大学医学部三年伊藤 将君、佐々木洋介君、沼田りり子さん、牟田真由子さん、セグド大学医学部三年圓山晶子さんの五名が本学附属病院で内科研修(実習)を受けました。前半二週間は本学医学科五年次学生のBSLに参加し、後半二週間は内科に特別プログラムを組んでいただきました。内科研修の立案・準備・実施していただいた奥村 謙学務委員長・循環呼吸腎臓内科学講座教授、内科研修を担当していただいた福田眞作消化器血液内科学講座教授、須田俊宏内分泌代謝内科学講座教授、西條康夫腫瘍内科学講座教授をはじめ、指導を行っていただいた内科各担当の先生方に厚くお礼申し上げます。

そもそもなぜハンガリー医科大学学生の内科研修を弘前大学が担当することになったのか、さらになぜこの記事を私が担当しているか、ということについて説明します。ハンガリー共和国の首都ブダペストにあるセメルweis 大学、南部のセグド大学、ペーチ大学、東部のデブレツェン大学(弘前大学の姉妹提携校)の医学部では約二十年前から英語による医学教育コースを開設し、日本を始め世界約二十各国から学生を受け入れています。五年前にセメルweis 大学、

セグド大学、ペーチ大学の三大学医学部英語コースの入学選考から卒業までを担当する「ハンガリー医科大学事務局(石倉代表)」が設立され、現在百名を超える学生が医学部学生として学んでいます。ハンガリーの医学部は日本と同様に六年制ですが、教養課程がなくすべて専門教育です。日本から入学する場合、直接入学が可能ですが、教育がすべて英語で行われるためほとんどの日本人学生は予備コースで一年間英語・理系科目を習得してから医学部に進学します。卒業の条件としてEU二十七ヶ国で通用する医師国家試験合格が義務づけられています。が、この資格は日本では通用しないため、日本で医師として働くためには日本の医師国家試験に合格しなければならず、受験資格は各個人の成績等の審査を経て与えられます。

平成二十年文科省から弘前大学に対し秋季入学の調査費が配当され、医学部医学科として学部については二年次後期学士編入学、大学院については「ハンガリー医科大学卒業生を本学大学院に入学させ、大学院秋季入学による医師国家試験の支援および国家試験合格後の青森県定着を促進する」という計画を立て、そのための調査を行いました。全学で組織された「秋季入学に関するワーキング

グループ」の医学研究科委員であった私が、平成二十一年二月に野呂入試課課長補佐(当時)とともに、セメルweis 大学とセグド大学を視察しました。各大学のプログラム担当の教授や日本人学生とも会い、いろいろと話をしました。学生の多くは卒業後日本での活躍を希望しています。が、日本の大学医学部との接触はなく、弘前大学医学部に興味を持ってもらいま

した。帰国後、石倉代表から卒業後を見据え弘前大学医学部での学生実習の受け入れを打診されました。ハンガリーの医学部では、一年次修了時に看護研修、三年次修了時に内科研修、四年次修了時に外科研修、六年度に総合臨床医学研修が義務づけられています。が、研修先は海外でも良いことになっているためです。これに対し、佐藤敬医学研究科長と相談しながら、学務委員会と事務方で検討をお願いします、ハンガリー医科大学事務局と研修に関する協定を締結し、今回の内科研修の運びとなりました。

七月二十九日には、ハンガリー医科大学受託実習生との意見交換会が開催され、医学部側からは奥村学務委員長、学務委員、内科研修指導担当教員、ハンガリー医科大学事務局から石倉代表が出席し、今回の内科研修に関する意見交換が行われ、学生および指導教員双方から良好な印象であること、来年度以降への希望が繋がりました。石倉代表からは、「これから弘前大学との関係を大切に、弘前大学一大学だけにお願したい。」との要望が出されました。

来年は外科研修も加わります。指導の先生方にはさらに負担となる事業ですが、弘前大学のユニークな活動として発展することを祈っています。ご理解の上、よろしくご協力をお願いいたします。

慰霊碑の参拝には、今年初めて二年次生全員が来たことは動物実験施設としても嬉しい限りです。さて、この紙面を借りて、動物実験施設のこの一年の活動について記載します。平成二十一年度の概算要求事項「心の遺伝子リポジトリ形成」(脳神経生理学講座・上野伸哉教授代表)が採択され、動物実験施設にシールドルームが設置されました。今年度は引き続き、「心の遺伝子リポジトリ形成」の予算の一部をいただき、遺伝子改変動物のための実験室の拡充工事を行います。また、一戸紀孝先生(神経解剖・細胞組織学講座元教授)によりマリモセットが導入されました。現在、動物実験施設で引き取り、引き続き飼養・繁殖を行い始めました。一方、佐藤医学研究科長のご尽力により、二階飼養室の一部改修と飼養ラック等の更新が行われ、設備更新に対する不安の多くが解消されました。現在いろいろな大学動物実験施設で、動物実験施設として独自の研究・技術を生かして独り立ちの努力をしており、私たちも動物実験施設としての研究・技術の特徴を出し、単に研究者の動物を預かり飼養する施設ではなく、動物実験をリードする中心基地にしていこう努力をしています。今後とも動物実験施設に対するご理解とご支援をお願いいたします。

動物慰霊祭開催される

動物実験施設長 中 根 明 夫
(感染生体防御学講座 教授)

去る五月二十日医学部基礎講堂において、遠藤正彦 学長をはじめとして、多数の教員および大学院・学生の臨席のもと、平成二十二年動物慰霊祭が行われました。慰霊祭では、まず佐藤敬医学研究科長から祭詞をいただきました。続いて、出席者による献花が行われ、厳かな中で慰霊祭は無事終了しました。慰霊祭に引き続き記念講演が行われました。本年は消化器外科科学講座橋田健一教授に「生体肝移植の臨床応用と弘前大学動物実験施設」と題する



講演をいただきました。わが医学研究科が誇る肝移植の研究、特に世界で最長生存日数を樹立した生体部分肝移植の話から話が始められ、橋田教授のグローバルな視点からの臨床・研究に関するよどみない講義に学生たちは感銘を受けていました。また、その後の動物



講演をいただきました。わが医学研究科が誇る肝移植の研究、特に世界で最長生存日数を樹立した生体部分肝移植の話から話が始められ、橋田教授のグローバルな視点からの臨床・研究に関するよどみない講義に学生たちは感銘を受けていました。また、その後の動物

講演をいただきました。わが医学研究科が誇る肝移植の研究、特に世界で最長生存日数を樹立した生体部分肝移植の話から話が始められ、橋田教授のグローバルな視点からの臨床・研究に関するよどみない講義に学生たちは感銘を受けていました。また、その後の動物

**The 12th Meeting of
Hiroaki International Forum of
Medical Science**

弘前国際医学フォーラム 第12回学術集会

**Sleep-wakefulness
and feeding behavior
-From genes to behavior-**

October 29(Fri), 2010 Hiroaki, JAPAN
Communication Center of Hiroaki University School of Medicine
Chairman: Kei Satoh
平成22年10月29日(金)
弘前大学医学部コミュニケーションセンター
会長: 佐藤 敬

Invited Speakers
James M. Krueger (Washington State Univ, USA)
Masashi Yanagisawa (Univ of Texas Southwestern Medical Center, USA)

Organizing Committee
Shinya Ueno, Kazuyoshi Hirota, Koichi Wakabayashi

Please visit Meeting Homepage at
<http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/~hkforum/kokusai12th.html>

Secretariat
Department of Neurophysiology, Hiroaki Univ Grad Sch of Med, 5 Zarfu-cho,
Hiroaki, Aomori, 0388562 JAPAN Tel: +81-172-39-5137 or 5138, E-mail: hkforum@med.hirosaki-u.ac.jp

弘前国際医学フォーラム 第12回学術集会の開催

脳神経生理学講座 教授 上 野 伸 哉

十月二十九日(金) 医学部コミュニケーションセンターにて第十二回弘前国際医学フォーラムを開催いたします。今回のテーマは、「Sleep-wakefulness and feeding behavior -From genes to behavior-」とし、行動を規定する遺伝子の探索という観点から、睡眠・覚醒や摂食行動を制御する生理活性物質の作用機構に焦点をあてます。またアメリカ合衆国テキサス大学サウスウェスタン医学センター分子遺伝学教室の柳沢正史教授、ワシントン州立大学 James M. Krueger 教授の招待講演を予定しています。

柳沢先生は、昭和三十五年生まれで、筑波大学医学専門学群を卒業後、同大学院で医学博士を取得し、京都大学第一薬理学講座講師を経て、テキサス大学サウスウェスタン医学センターへ移籍されました。業績としては、生理活性物質のエンドセリン、オレキシンとそれらの受容体の同定

と機能解析に関する研究で多くの成果を上げられ、Nature, PNAS, Cellなどの超一流の科学誌に多くの論文を出されており、ES細胞の山中伸弥先生らとともに将来のノーベル賞候補の一人と目されており、行動を規定する遺伝子の探索という観点から、睡眠・覚醒や摂食行動を制御する生理活性物質の作用機構に焦点をあてます。またアメリカ合衆国テキサス大学サウスウェスタン医学センター分子遺伝学教室の柳沢正史教授、ワシントン州立大学 James M. Krueger 教授の招待講演を予定しています。

このように弘前国際医学フォーラムは、世界の第一線で御活躍の先生方の御講演を拝聴できる良い機会ですので、皆さま是非ご参加ください。 <http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/~hkforum/kokusai12th.html>

平成22年度

二年次後期入学選抜が終わる

医学科入試専門委員長 中 根 明 夫
(感染生体防御学講座 教授)

平成二十二年四月に三年次学士編入学八期生が入学し、カリキュラム改正の境界に当たる年のため、二年次科目については特別カリキュラムが組まれ、二十名のみの講義・実習と恵まれた教育を享受しています。一方、九期生からは二年次後期学士編入学に変更となり、今回初めての入試選抜を行われました。これまで、三段階の選抜が行われ、第一次選抜は英語、基礎自然科学、小論文の三科目の試験により入学定員の十倍程度に絞り、第二次選抜では英語、生命科学、集団面接により入学定員の三倍程度に絞り、第三次選抜の個人面接により最終合格者が決定されてきました。今回から実施が開始された二年次後期学士編入学では、年度内の出願開始および入学手続きの関係から七月中に合格者を決定するという時間的な制約があり、入学選抜方法について見直しが行われました。その結果、二段階選抜とし、第一次選抜は、英語、基礎自然科学の試験結果により入学定員の五倍程度に絞り、第二次選抜は生命科学、小論文、個人面接を行い、最終合格者が決定されることになりました。そして、六月六日に第一次選抜試験が行われ、合格者百九名に対し、七月三日・四日の両日に第二次選抜試験が行われ、七月二十二日に最終合格者発表が行われました。今回の入試選抜の志願者は四百一名で、これまでの三年次学士編入学選抜試験に比べると若干減少しましたが、これが入試選抜時期に起因するものかどうかは今後の動向を見なければわかりません。志願者減は予想していたのですが、その減少率が予想より低かったので安心しました。倍率は二十・〇倍でした。内訳は県内枠七・二倍、全国枠は二十四・三倍と、二十二年次三年次学士編入学選抜試験と大差はありませんでした。県内枠の弘前大学出身(在学)の志願者は十五人とこれも平成二十二年次三年次編入学選抜試験と差がありませんでした。平成二十二年度の県内枠と全国枠を合わせた志願者および合格者の内訳をみると、これまでの三年次学士編入学試験と激変した傾向は見られません。ただ、県内枠合格者の出身大学をみると、東北大学三名、東京外国語大学と新潟大学各一名で、弘前大学の合格者がなく、気になるところです。全国枠では十五名中関東勢が九名、関西勢と東海勢が二名、東北勢と北海道勢が一名、そして青森県在住が一名となっています。女性の合格者は三名でした。年齢別では二十歳代が十七名、三十

や実施に多くの教職員のご協力をいただき、つつがなく終えることが出来たことに心から感謝しています。またすぐAO入試選抜が始まります。引き続き多くの教員の方々や学務担当をはじめとした事務職員の方々に入試業務をお願いしなければなりません。どうぞよろしくお願いいたします。最後に、今回、第一次選抜の基礎自然科学の問題に用いた図に誤解を与える表記があり、その部分を全員正解としマスコミにも公表しました。問題のチェック体制を厳しくするなど、今後このようなことがないような改善をしていきますので、よろしくご理解とご支援をお願いいたします。

平成22年度二年次後期学士編入学合格者出身大学

- 3名合格：東北大学、東京工業大学
2名合格：京都大学
1名合格：東京大学、東京外国語大学、埼玉大学、新潟大学、奈良女子大学、岡山大学、広島大学、慶応義塾大学、早稲田大学、明治薬科大学、ボストン大学、アーカンソー大学

平成22年度二年次後期学士編入学合格者出身学部

- 理工系10名、薬学系3名、農学系2名、保健学系2名、歯学系1名、文系2名



平成22年度
弘前大学医学部鵬桜会総会
ならびに懇親会報告

総合医学教育学講座 教授 加藤 博之

平成二十二年年度弘前大学医学部鵬桜会総会ならびに医学科三年次編入生の歓迎会を兼ねた懇親会が、平成二十二年五月二十二日午後三時半より、医学部コミュニケーション・センターで行われた。総会は、収支決算報告、事業計画、予算審議、法人改革制度が主な議題であり、滞りなく了承された。続いて医学科三年次編入生代表の江目孝幸さん、柞木田なつみさんへ、石戸谷忻一理事長から記念品贈呈があり、また平成二十一年度東医体にて優勝した剣道部男子団体ならびに陸上部男子走り幅跳びの小玉 祐君、水泳女子二〇〇m個人メドレー、同一〇〇m平泳ぎの高林杏奈さんが、石戸谷理事長から表彰を受けた。最後に西澤一治常務理事が三年次編入生のため、スライドを用いて弘前大学医学部医学科の歴史ならびに鵬桜会の紹介を行った。

平成22年度科学研究費採択状況
附属病院における
採択件数が増加

分子生体防御学講座 教授 伊東 健

医学研究科および附属病院における平成二十二年年度の科学研究費採択状況が公表されました。まずは付表をご覧ください。平成二十一年度と比較すると、採択件数では医学研究科が六十件から五十九件と横ばいだったのに比べ附属病院では二十五件から三十三件と大幅に増加しました。附属病院では採択率も十七・七%から三十・〇%とすごい増加をみせています。交付額でみると、医学研究科では微減だったのですが、附属病院の増加により全体では

ピーチを終えた加納さんが引き続き司会を担当し、編入生全員のスピーチを見事に取り仕切った。まさに名司会(名歯科医?)だったと言える。編入生は大学を卒業後、職に就いていた人も多く、スピーチはそれぞれのキャリアに応じた見識が感じられ、頼もしい思いであった。当日は退官された懐かしい先生方も大勢出席され、皆さんユーモアとウィットに富むお話を披露され、大変楽しいひと時を過ごさせて頂いた。

平成 21 年度 (新規+継続)	申請数	採択数	採択率 (%)	交付額 (千円)
医学研究科	174	60	34.5%	158,067
附属病院	141	25	17.7%	42,120
全体	315	85	27.0%	200,187

平成 22 年度 (新規+継続)	申請数	採択数	採択率 (%)	交付額 (千円)
医学研究科	160	59	36.9%	152,401
附属病院	110	33	30.0%	52,520
全体	270	92	34.1%	204,921

平成 22 年度 (新規+継続)	医学研究科	附属病院
基盤研究 S	0	0
基盤研究 A	1	0
基盤研究 B	10	0
基盤研究 C	31	16
特定領域研究	0	0
新学術領域研究	2	0
挑戦的萌芽研究 (萌芽)	5	0
若手研究 A	0	0
若手研究 B	9	17
若手研究 (スタートアップ)	1	0
特別研究促進費	0	0
研究成果公開促進費	0	0
特別研究員奨励費	0	0
合計	59	33
総計	92	

第94回弘前医学会総会・評議員会、青森市で開催される

弘前医学会庶務幹事 奥村 謙
(循環呼吸臓内科学講座 教授)



教授 袴田健一

平成二十二年六月十九日（土曜日）午後、第九十四回弘前医学会総会が青森市のホテル青森で開催された。第九十四回総会は青森市医師会の当番で、五十一名が参加した。総会に先

立って弘前医学会評議員会が開催され、平成二十一年度の事業報告（奥村庶務幹

事）、決算報告（蔵田会計幹事）があり、いずれも承認された。さらに平成二十二年度の事業計画案、

総会では総会長の成田祥耕青森市医師会長と弘前医学会会長の佐藤敬医学部長の挨拶に続き、評議員会での検討事項が報告、承認された。続けて一般演題の発表が行われ、今回は基礎系の演題四題、臨床系の演題四題、合計八題が発表された。弘前医学会では毎

回、発表演題一題を優秀発表賞として選考、表彰することとなっているが、五名の審査委員による選考の結果、弘前大学病理生命科学講座の赤坂治枝氏（演題名…ヒト乳癌細胞における細胞接着因子 claudin-1の発現と機能の解析）に決定した。さらに平成二十一年度の弘前医学会優秀論文賞として、弘前大学消化器外科学講座（現在八戸市民病院外科）の野田頭達也先生の論文が選考された。一般演題発表終了後、優秀発表賞と優秀論文賞の表彰が行われ、各受賞者からの挨拶に続き、記念撮影が行われた。

特別講演は、弘前大学消化器外科学講座の袴田健一教授が「変容する外科と地域医療のこれから」というタイトルで講演を行った。外科医の役割が多岐にわたる一方、地域医療を支える実働外科医師数が減少しつつある現状を紹介し、外科医の魅力を次世代に周知するための取り組み、例えば、青森県内の中学・高校生等を対象とし、「手術体験セミナー」を開催していることなどが紹介された。興味深かったのは消化器外

科学講座（旧第二外科学講座）の教室員数の年次推移のグラフで、今後何名が消化器外科に入れば現状が維持されるのかなど、詳細な分析データを示し、講演をしめ括った。

なお、平成二十三年度の総会は上十三医師会が当番で、十和田市で開催されること、次々期の平成二十四年度は南黒医師会の当番で開催されることも評議員会・総会で決定された。

第94回総会優秀発表賞を受賞して

病理生命科学講座 大学院四年 赤坂治枝

この度、第九十四回弘前医学会総会において、優秀発表賞というすばらしい賞をいただきました。誠にありがとうございます。

今回は、私の学位の研究テーマであり、「ヒト乳癌細胞における細胞接着因子 claudin-1の発現と機能の解析」という発表でした。claudin-1とは、細胞と細胞を繋げる役割を持つ細胞接着因子の構成因子の一つであり、癌においてその進展に関与している可能性が指摘されており、具体的な役割は不明でした。今回は癌細胞のアポトーシスに関与しているのではないかとという仮説で研究を進めてまいりました。

そもそも、消化器・乳腺・甲状腺外科に所属する私が病理生命科学講座で claudin-1 について研究をさせていただいているのは、私が病理について勉強したいという希望があり、

それに配慮していただけたということ、先輩の先生が乳癌の切除切片を用いて、claudin-1の発現低下と予後に相関があることを報告していたこと、がきっかけでありました。また、病理生命科学講座での以前の研究から、アポトーシスとの関連が示唆されていた、ということが研究テーマを決定した経緯です。とはいえ、初めは claudin-1 について、何がわかっていて、何を研究したら新しいのかさ分からず、指導してくださいました先生に「おんぶに抱っこ」の状態の研究が始まりました。といっても過言ではありません。半ば言われるがまま実験を行い、時にはどの方向へ進んでいるのかわからなくなる時もありましたが、そんな私の素朴で失礼な疑問にもその都度お答えいただきながら、少しずつ道が見えてきたような、そんな研究生活です。やがて研究にも慣れ、実験結果の

平成21年度優秀論文賞を受賞して

八戸市立市民病院 野田頭達也

この度、伝統ある弘前医学会において、平成二十一年度優秀論文賞を賜り誠にありがとうございます。数ある優秀な論文の中から私の論文が受賞したことは、私自身、とても驚いています。大変光栄なものと存じます。選考委員の先生方をはじめ関係者の皆様

に厚くお礼申し上げます。今回受賞した、「Efficient gene transduction in HER2-expressing cancer cells by two recombinant adenovirus vectors with HER2 promoter and Cre/loxP system」なる論文ですが、大学院在籍中に研究した内容をまとめたものです。その要旨を簡単に紹介します。

組織特異的プロモーターは癌特異的自殺遺伝子治療において用いられていますが、その転写活性は低く、HER2発現腫瘍の遺伝子治療をより効率よく行うために、組織特異的プロモーターの調節のもとにCre 蛋白が働く「制御」ベクターと、Cre 蛋白によって活性化される「標的」ベクターを組み合わせた二重アデノウイルスシステムが確立されています。これの応用として、HER2プロモーターのもとで働くCre発現ベクター AxHER2Cre を制御ベクターとして作成しました。標的ベクター AxCALN2 とこのベクターの組み合わせによりHER2発現細胞株でβガラクトシダーゼの発現を観察しました。HER2高発現の細胞で高いβガラクトシダーゼの活性が認められ、HER2低発現の細胞ではβガラクトシダーゼの活性は低く、HER2発現量との間に相関性が認められました。その活性は、強力なプロモーターとして知られる

子治療をより効率よく行うために、組織特異的プロモーターの調節のもとにCre 蛋白が働く「制御」ベクターと、Cre 蛋白によって活性化される「標的」ベクターを組み合わせた二重アデノウイルスシステムが確立されています。これの応用として、HER2プロモーターのもとで働くCre発現ベクター AxHER2Cre を制御ベクターとして作成しました。標的ベクター AxCALN2 とこのベクターの組み合わせによりHER2発現細胞株でβガラクトシダーゼの発現を観察しました。HER2高発現の細胞で高いβガラクトシダーゼの活性が認められ、HER2低発現の細胞ではβガラクトシダーゼの活性は低く、HER2発現量との間に相関性が認められました。その活性は、強力なプロモーターとして知られる

解明や次の実験計画を自分でも考えられるようになってきた時は、自分のことながら少し嬉しく思うこともありました。

これらのことは、指導してくださった全ての先生方、共に研究生活を送っている大学院生の皆さまのおかげであり、今回の賞も決して一人で取れたものではありません。この場をお借りし、感謝申し上げます。また、研究結果は一区切りついた形ですが、まだまだ分からないことだらけで、

CAプロモーターを用いた AxCANCre と AxCALN2 の組み合わせに匹敵するものでした。以上の結果からHER2プロモーター制御下の Cre/LoxP システムはHER2発現特異性を保ち、かつ、効率的な遺伝子発現を行えることが示唆されました。

私は、昭和六十三年自治医科大学を卒業し、出身県である青森県に戻り僻地を中心に勤務医をしていました。平成十年に第二外科学教室の佐々木睦男教授の薦めがあり、社会人として第二外科の大学院へ入学することが出来ました。当時、公立野田地病院に勤務しておりましたが、研究と臨床を両立させるのは困難で、院長の熊谷達夫先生のご尽力により、大学院の三年目、四年目の二年間、野田

地病院を休職し、大学での研究に専念することが出来ました。その結果、無事、大学院を卒業し学位を取得することができました。さらに、今回、その研究の内容に對し、このような賞を頂くことができたことは、本当にうれしく思います。本論文の完成にあたり、御指導いただいた佐々木睦男前教授、袴田健一教授、研究、論文を直接御指導いただいた小田桐毅准教授、ご協力いただいた教室の先生方、当教室実験室の皆様にご心からお礼申し上げます。現在、私は八戸市立市民病院の救命救急センターに勤務しておりますが、本賞受賞を励みに、医学と医療の発展に微力ながら貢献できればと思っております。今後ともよろしくお願いたします。



米国・Mercy St.Vincent Medical Center 外傷センターを視察して

高度救命救急センター 助教 境 雄 大

弘前大学医学部附属病院
高度救命救急センターの設
立にあたり、二〇一〇年五
月に米国の外傷センターを
視察した。視察先はオハイ
オ州のトランド Mercy St.
Vincent Medical Center だ
る。

1. 背景・病院の紹介

トランドはオハイオ州北
西部、ミシガン州との州
境、エリー湖の西端に位置
する人口約三十一万人の都
市で、周囲を含めた都市
圏の人口は約六十五万人
である。Mercy St. Vincent
Medical Center は Level I
外傷センターという米国の
最高水準の外傷診療施設
に認定されている。救急救
命室 (Emergency Room) 以
下、E.R.) 受診患者は年間
約六万人である。救急救
療と関係する入院施設に
は Surgical ICU、Medical
ICU、Pediatric ICU、
Neuro ICU、Burn Care
Unit があり、疾患により
細分化されている。

2. 視察した診療部門

今回視察したのは Trau-
ma, Emergency and Critical
Surgical Services (TECCS)
という部門である。TECCS
は外傷センターという場所
を指すのではなく、外傷、
熱傷、外科的救急患者の初
期診療を行う診療部門であ
る。スタッフは医師五名、

レジデント五名、ナースプ
ラクティションナー三名から
構成される。TECCS のス
タッフ医師は一般外科医の
中でも特に外傷の診療能力
を有する医師で、一般外科
医を兼任する。

3. 外傷部門 (TECCS) の医師の診療活動

TECCS が扱う領域は本
邦の一般病院の救急外来で
当直医が診療する外科系疾
患群と同様である。すなわ
ち、急性腹症、外傷、熱傷
などである。TECCS の医
師は対象患者が受診する
と、E.R. の医師とともに診
療する。E.R. 診療の中心は
レジデントで、原則として
複数で診療を行う。レジデ
ントの診察は統一化されて
おり、その診療



的に治療方針を決定する。
外傷患者の初期診療にお
いて TECCS は極めて重要
である。外傷患者は複数部
位の損傷を有することが多
く、最初は TECCS 扱いで
入院することが多い。外傷
患者のうち、緊急手術を要
するのは約七%で、最終的
に約三十%が手術を要す
る。TECCS 医師は一般外
科医として腹部外傷などの
緊急手術を行うが、同部門
ですべての治療行為を行う
わけではない。例えば、骨
折に対する観血的治療は整
形外科医が行う。ある整形
外科医は TECCS を「Good
Coordinator (良き調整役)」
と表現しており、高い信頼
と評価を受けている。
TECCS では外傷手術の
みならず、虫垂切除術、ヘ
ルニア嵌頓に対する修復術
など外科救急疾患の緊急手
術も行う。緊急手術は極め
て迅速に開始することがで
きる体制が整えられてい
る。手術操作は医師の経験
年数、手術の難易度などを
考慮して、レジデントも手
術の一部を担当し、救急診
療と教育の両立に十分な配
慮がなされている。
TECCS の入院患者は約
二十五名であった。毎朝、
患者に関する約一時間のカン
ファレンスが行われる。
カンファレンス前にレジデ
ントは患者評価を行い、入
院患者全員の一覧表を作成
する。レジデントが患者の
状態を報告し、治療方針が
検討される。入院患者の担
当医はレジデントとスタッ
フ医師各一名である。レジ
デントとスタッフ医師の組
み合わせは患者により異な
り、レジデントは複数のス
タッフ医師の指導を受ける
ことができる。カンファレ
ンス後にはスタッフ医師が
自ら回診を行い、レジデン
トのカルテをチェックす
る。外傷患者、外科的救急
患者は原則として Surgical
ICU に入院するが、病状が
安定すれば一般病棟へ転棟
する。熱傷患者は気道熱傷
など最重症の患者から、退
院前の患者まで熱傷に関
するすべての入院診療を
Burn Care Unit で行ってい
る。退院などの治療方針の
最終決定はスタッフ医師が
行う。本邦とは異なり、患
者・家族は可能な限り早期
の退院を希望している。米
国では本邦と医療保険制度
が異なることが主因と思わ
れる。

4. 救急患者搬送

患者搬送にはヘリコプ

ターが日常的に使用されて
いる。同院は院内外に五機
のヘリコプターを所有し、
遠方からの患者搬送も迅速
に行われる。ヘリコプター
に医師が同乗することはほ
とんどなく、ヘリコプター
はあくまでも患者搬送手段
としての役割が大きい。米
国では救命士が行うことが
できる医療行為が本邦と異
なることが一因であろう。

5. まとめ

E.R. や病棟では各職種が
プロ意識を持って仕事をし
ている。救急患者の搬送に
ヘリコプターを日常的に使
用している。外傷部門の担
当医は外傷治療にも精通し
た一般外科医の集団で、外
傷、熱傷、一般外科救急疾
患の初期診療を担当する。
すべての診療を外傷部門で
完結しようとするわけでは
なく、患者治療の窓口(コー

ディネーター)としての役
割が大きく、他のスタッ
フからの信頼も厚い。米国の
Level I 外傷センターにお
いても、決して外傷に対し
て特別な診療を行うわけで
はなく、一定のレベルで、
効率よく、迅速に診療を行
なう体制が整っている。E
R や救急治療を病院全体と
してサポートする体制が
整っている。

研究室紹介

脳神経病理学講座

若 林 孝 一

(脳神経病理学講座 教授)

当教室は何度か名称を変
更しています。一九六五年
に成因部門としてスタート
し、一九八九年には神経病
理部門、一九九九年に分
子病態部門となりました。
二〇〇七年の大学院部局化
に伴い脳研は医学研究科の
附属施設となり、当教室も
大学院講座となりました。
その際、脳神経病理学講座

と名称を改めました。
現在、教室の構成は、ス
タッフが若林孝一(教授)、
森文秋(准教授)、丹治邦
和(助教)の三名、これに
三名の大学院生と標本作成
の中田さんを加え総勢七名
です。
若林は学内や県内基幹病
院の協力を得て、脳神経疾
患の病理検査を担当してい



学生を交えてブレインカッティング

ます。森は免疫染色、免疫
電顕、形態計測などの手法
を用い病理形態学を基盤と
した研究を継続していま
す。丹治は細胞培養、分子
生物学といった手法に加え
、遺伝子改変動物を用いた
病態解析を行っています。
最近では、中国医科大学
出身の大学院生である張
さんが二〇〇八年に弘前
医学会優秀発表賞を受賞。
二〇〇九年には社会人大学
院生の三木君(青森県立中
央病院神経内科)が筆頭著
者として五編の英文原著論
文を発表し、学生表彰を受
けました。この九月にはザ
ルツブルグで開催された国
際神経病理学会で三題の発
表を行いました。
さて、当教室には七つの
信条があります。以下にそ
れを紹介したいと思います。
1. 『学生を大切にせよ』
若い時ほど、より多くの
可能性を秘めています。そ

れを引き出し、伸ばしてや
るのが我々の仕事のひとつ
と考えています。
2. 『論文作成のために一
分一秒を惜しめ』
論文を書いている間は論
文のことだけを考え、食事
中にごはんをこぼしても気
付かず、就寝中も夢の中で
論文の文章が浮かんでくる
ようであればいいかもしれ
ん。寝言が英語で出れば一
流と言われています。
3. 『小さな分野でも世界
のトップとなれ』
オンリーワンを目指し、
目標は高くということだ
す。
4. 『仲間を作れ』
今は共同研究の時代で
す。力を合わせれば小さな
教室でも大きな仕事が可能
です。
5. 『かわいい子には旅を
させよ』
丹治は米国に三年間、森
もスペインに一年半留学し
ました。学問だけでなく、
国際的な視野を広げること
も重要です。
6. 『学問研究の扉は常に
オープンであれ』
常識にとらわれない発
想。思ってもみなかった結
果。転機はいつ訪れるかわ
かりません。そのために
も、いつも心の窓を開けて
おきましょう。
7. 『人生は楽しく、幸せ
に』
幸せであることが、人生
の目標と考えます。そのた
めの学問研究です。
結局のところ、研究と教
育については真剣に、それ
以外は和気あいあいとやっ
ています。ご質問やご相談
などございましたら、どう
ぞお気軽に足をお運び下さ
い。

海外留学便り 1

小児科学講座 助教 工藤 耕

耕

私は二〇〇九年十月からアメリカ、テネシー州メンフィスの St. Jude Children Research Hospital に留学する機会をいただき、Department of Oncology で基礎研究を行っております。このたび、留学便りという貴重な機会を与えていただきまして、米国での留学生活について紹介させていただきます。

St. Jude Children research hospital は、これまで長年にわたり急性リンパ性白血病をはじめとする、小児がんの研究および治療の両面において大きな功績を残し

ており、現在も世界的に有名な小児がんの研究治療施設です。喜劇俳優である Danny Thomas 氏の「人生の夜明けにあたる幼少時に、一人の子どもも死なせてはいけない」という呼びかけのもと設立されました。一日あたり数億円という莫大な運営費用は、大部分が一般人および企業からの寄付金により運営されている非常に個性的な病院です。家族の支払い能力に関係なく患児を受け入れ、全ての患者の医療費は無料で（保険請求以外の自己負担分を病院が負担）、付き添いの家族の滞在費や食費、交通費まで補助しています。

医療費が非常に高い米国において、治療研究に参加すれば全く医療費の心配をしなくて良いという事になります。各種の研究グラントを多数取得するとともに、ALSAC という機構を設立し、民間から寄付を募っています。有名



大企業から患児の友だちまで、社会全体が寄付をしてこのような巨大施設を運営するこのしくみは私にとって非常に大きな驚きでした。

研究面の特徴としては、研究者が新しい医療を開発し、医師が臨床の場で試用して有効性や安全性を確認し、日常医療へ応用しているところ

に、免疫療法の研究に参加しております。免疫細胞であるナチュラルキラー細胞を体外で大量に増幅して治療に利用する試みです。数年前、当研究室で日本人研究者の貢献によって開発され、現在まさに臨床応用が始まる場所です。私も少しでも貢献できればと、日々奮闘しているところ

です。

アメリカの生活について紹介いたしますと、私の住んでおりますメンフィスという街は、アメリカ南部の人口約六十八万人の地方都市で、ミシシッピ川に面した、とても自然に恵まれたところ

です。エルヴィスプレスリー、バーベキュー、綿花、ブルースが有名です。どこにいても人混みはなく、遊びに行くよりは住むのによいところだそう

です。人々はとてもんびりしており、陽気で親切です。外国に住むことは旅行で訪れるのとは違うと聞いておりましたが、本当にその通り

です。長年この手法で、特に小児急性リンパ性白血病の治療成績の向上に大きく貢献しております。私は現在、小児急性白血病の微小残存病変診断の世界的権威である Dario Campana 博士の研究室に所属し、主にナチュラルキラー細胞など免疫細胞を利用した小児が

に、免疫療法の研究に参加しております。免疫細胞であるナチュラルキラー細胞を体外で大量に増幅して治療に利用する試みです。数年前、当研究室で日本人研究者の貢献によって開発され、現在まさに臨床応用が始まる場所です。私も少しでも貢献できればと、日々奮闘しているところ

留学だより

海外留学便り 2

麻酔科学講座 助教 遠瀬 龍二

自分が日本人であることや日本という国を強烈に意識するようになり、これまで無関心であった自国の文化に興味を持つようになりました。これらは以前から聞いていたことですが、自分が実際に体験することは非常に貴重

です。重であると感じております。このような機会をいただき、伊藤悦朗教授をはじめ多くの方々に本当に感謝しております。残りの留学生活、生涯の財産となるように充実したものにしたいと思います。

私の留学先はイギリスのレスター大学で、心臓血管科学講座、麻酔・集中治療・疼痛制御医学部門の Lambert 教授のもとでオピオイドレセプターについて研究をしております。研究の詳細は教授に固く口止めされているので報告することはできませんが、簡単に言えばオピオイド使用に伴う副作用や耐性を減らすという目標を目指して研究しています。ここでは基礎的な研究がメインなので直接臨床に役立つというわけではないのですが、将来自分の研究成果が少しでも役に立てばと思います。実際に

イギリスに到着した時から Lambert 教授に迎えに来て頂き、最初の一週間は大学病院やレスターの中心部の紹介、また銀行口座の開設を手伝っていただきました。そのため生活を始めるのは楽でした。某国某大学に留学した本講座の先人たちは、全部自分でやったそうなのでただただ感謝します。また Lambert 教授には事あるごとにお世話になっているので感謝するばかり

です。実は留学前はかなりネガティブな感情しかありませんでした。イギリスには二回、アメリカには一回学会等で各々一週間位ずつ行っただけなのに、言葉はあまり通じず、文化は全く異なり、口に合わない料理を毎日食べ、さらに治安は日本より悪いという所感しかなく、現地では早く日本に帰りたいという感情しかありませんでした。実際最初の三ヶ月は実験に対す

自分の想像通りだったのと全く異なっていたのが半々くらいでした。よく話のネタにされるイギリス料理が美味しかったのはびっくりしました。春から夏は非常に天気良く日照時間が長く気温も適度で、この点

は、自分の想像通りだったのと全く異なっていたのが半々くらいでした。よく話のネタにされるイギリス料理が美味しかったのはびっくりしました。春から夏は非常に天気良く日照時間が長く気温も適度で、この点

は、自分の想像通りだったのと全く異なっていたのが半々くらいでした。よく話のネタにされるイギリス料理が美味しかったのはびっくりしました。春から夏は非常に天気良く日照時間が長く気温も適度で、この点



けは弘前より遥かに住みやすいです。冬も例年雪はあまり積もらないので、たった 10cm 雪が降っただけでトップニュースになり交通機関が麻痺しました。紳士淑女の国というのとおり、基本的にみんな優しく接してくれて本当に助かります。取り留めのない文章になってしまいましたが、現在は元気に生活しています。本講座と弘前大学には貴重な体験をする機会を与えていただき感謝するばかり



コラム

医学部

こぼれ話...

いったん教授となった後に簡単にやめたり、腰掛けのごとく短い期間で移動するのは困りものである。人材の流動性を高めることが、いいことのようにいわれても、流動して一極集中を作るだけではないのか？となってしまう。以前留学先でのラボの移動の際、ボス

が動く時は、助教、研究生のみならずラボテクニシャン（日本では実験補助職員といったところ）も含めて、教室がまるごと空になることを目にした経験からは、トップだけ引っ張って残りはポイでは、そんな無責任なことではうまくいくのか？とも思ってしまう。

地域医療を考える シンポジウムを開催して

社会医学センター長 中路 重之
(社会医学講座 教授)

第二回地域医療を考えるシンポジウムが平成二十二年七月十日(土)午後二時から弘前大学創立五十周年記念会館 みちのくホールで開催されました。テーマは、「弘前大学の高度救命救急センターをどのように活かしていくか」でした。

主催は弘前大学大学院医学研究科、共催は弘前大学医師会、後援は弘前市、青森医学振興会、弘前大学大学院医学研究科社会医学センターでした。

折しも、高度救命救急セ



進行はシンポジウム形式で行われ、シンポジストと講演タイトルは以下のようでした。

浅利 靖先生 (弘前大学医学部附属病院高度救命救急センター長)

「弘前大学医学部附属病院高度救命救急センターの役割について」
松川昌勝先生 (弘前市立病院長)



「弘前地区の救急医療の現状と高度救命救急センターへの期待」
司会は私(中路)がとめました。

浅利先生の発表内容は、当センターの創設に至る経緯と現状、そして市民・関係機関の皆様への要望等でした。また、松川先生の発表内容は、津軽地域の救急医療の実態、とくに輪番病院の勤務の過酷さに関するものでした。

当日は、葛西弘前市長、鳴海黒石市長、田村弘前市医師会会長、二川原大鰐町長をはじめ多くの市民、関係者の方々に参加していただきました。

シンポジウム全体(質疑応答を含む)をまとめれば以下のようになります。

①市民、関係者の絶大な支援により当センターがオープンできた。

②北米型の ER (軽症から重症まで引き受ける)ではなく、重症型を受け入れる。

③しかし、当センターには多くの問題点や弱点が存在する(経済面、人的問題など)。

④②や③において、市民、関係諸機関の協力が不可欠である。

⑤現状の市内の救急輪番制度は年々患者が増加し過酷さを増している。

⑥当センターが設置されたことにより、この地域の救急制度を全体的に見直し整備していく必要がある。そのためには、大学の努力は勿論であるが、市民(啓発)、医師会(かかりつけ医のトリアージ)および市町村の協力(経済的支援など諸般の支援)が必要である。シンポジスト発表後の質

人事異動

●大学院医学研究科

採用(22・6・1)

消化器血液内科学講座 助教
平賀 典子(医員)

内分泌代謝内科学講座 助教
田辺壽太郎(医員)

神経精神医学講座 助教
金田 絢子

整形外科科学講座 助教
鈴木 雅博(医員)

皮膚科学講座 助教
武田 仁志(医員)

麻酔科学講座 助手
高田 典和(医員)

辞職(22・6・30)
神経解剖・細胞組織学講座 教授
一戸 紀孝

(独国立精神神経医療研究センター)

採用(22・7・1)
循環呼吸臓内科学講座 助手
遠藤 知秀(医員)

小児科学講座 助手
渡邊祥二郎(医員)

消化器外科学講座 助教
木村 憲央(医員)

配置換(22・7・1)
脳神経外科学講座 助教
榎方 聡

(脳神経外科助教)

採用(22・8・1)
放射線科学講座 講師
成田雄一郎

(青森県立中央病院)

辞職(22・8・31)
糖鎖工学講座 助手
小泉 英誉

採用(22・6・1)
呼吸器外科・心臓血管外科 助手
福田和歌子(医員)

辞職(22・6・30)
整形外科 助教
三井 博正

(いずみ記念病院)

泌尿器科 助教
橋本 安弘

(鷹揚郷腎研究所弘前病院)

採用(22・7・1)
整形外科 助教
山崎 義人(医員)

泌尿器科 助教
畠山 真吾

(鷹揚郷腎研究所弘前病院)

脳神経外科 助手
佐藤 純子(医員)

脳神経外科 助手
松田 尚也(医員)

昇任(22・7・1)
総合診療部 准教授
大沢 弘

(総合診療部講師)

辞職(22・7・31)
眼科 講師
山崎 仁志(黒滝眼科)

採用(22・8・1)
眼科 助教
横井由美子(医員)

昇任(22・8・1)
泌尿器科 講師
米山 高弘

(泌尿器科助教)

診療教授等称号付与者

診療准教授

須貝 道博(小児外科講師)

平成二十二年六月一日〜平成二十五年五月三十一日

診療講師

境 雄大(高度救命救急センター助教)

平成二十二年八月一日〜平成二十五年七月三十一日

編集後記

今年の夏は猛暑により各地で過去最高の記録を更新しています。私がいる基礎医学総合研究棟においても、階を増すにつれ蒸し暑さが激しく、エアコンなしで頑張っておられる職員の方々には頭が下がる思いです。そんな時、一筋の風をとて心地よく感じているのは私だけではないかと思います。

翻って組織の風通しの良さとは何かと考ええると、思っていることを自由に言い合えること、すなわちコミュニケーションの密度が高いことを意味するのだろーうと思います。大局的にみると、各部署間の横のつながりが多いこと、と言えるかもしれません。研究の分野で考えると、規模の小さい地方大学の研究者が、中央の大学で働く研究者に立ち向かっていくためには、より一層講座の垣根を超えて横のつながりをふやしていくなくてはならないように思います。きれいな織物は、縦糸と横糸との絶妙な調和があつてこそ、素晴らしい模様が生まれます。さて、どうしたら横糸が増やせるでしょうか。私ともいいた大学では、喫煙所が垣根をこえたコミュニケーションの場になっていました。そういったサロンの空間の必要性も考えなくてはならないのかもしれないですね。また、大きな目標を掲げることが一体感を増して横のつながりを強めるかもしれません。夏でも涼しく感じられるような、そんな大学でありたいものです。(伊東 記)